

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	地域や関係諸機関との積極的な連携・協力が行われている実践事例
-------	--------------------------------

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

和歌山県西牟婁郡白浜町

○学校名

白浜町立日置中学校

○学校のURL

http://www.town.shirahama.wakayama.jp/hiki_jhs/

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各1学級、【特別支援学級】1学級、【合計】4学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】58人（平成26年5月1日現在）
（内訳：1年生21人、2年生19人、3年生18人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成25,26年度人権教育研究推進事業人権教育総合推進地域推進協力校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒の育成

【人権教育の方針】

教育目標の具現化を目指す日々の取組をとおして、すべての生徒に人権尊重の精神を身につけさせる。日常生活の中の矛盾や不合理を鋭く見抜き、それを解決する実践力を持った生徒を育てる。

【人権教育の具体的な目標】

- 1 自治の力をつける
生徒相互が協力・理解し合い、身の回りの諸問題をみんなで解決していこうとする自治的な力を育てる。
- 2 人権感覚を高める
人権や人権問題を正しく理解し、自他の人権を尊重しようとする態度を育てる。
- 3 地域と手を結ぶ
仲間とともに積極的に地域の行事等に参加し、貢献しようとする態度を育てる。

○人権教育に係る取組一口メモ

地域と連携した人権が尊重される授業づくり

○人権教育にかかる取組の全体概要

○人権が尊重される授業づくり

授業研究、先進校視察、校内研修を通じ、従来の授業モデルに加え、「人権を尊重する授業づくり」の研修を行っている。授業研究は全教師参加型の研修を行い、外部から講師を招聘し取組の充実を図っている。教師中心から生徒中心の授業への転換を図り、生徒の学力向上や、若手教師の授業力向上を図るため、上記の授業研究を組織的、計画的に進めている。

○地域との連携

学校は地域の一部であり、学校は地域の一断面であるとして、過疎化、少子高齢化が進むこの中学校区において、中学校の使命を、地域に根を張り、地域づくりの一翼を担うこととしている。そこで、保護者・地域から協力を得るだけでなく、積極的に地域に貢献するという視点で教育活動全般を見直した。地域のネットワークづくりや家庭教育支援が幅広いものになり、地域に活力が戻り、日置という地域に愛着と自信をもった生徒の育成に取り組んでいる。

○小中の連携

小中が連携し9年間を見通した教育を進めている。保育園も含め共同の取組を展開することで、生徒の現状をより正確に把握することに努めている。

具体的には、相互の授業研究への参加、合同の授業研究や研修を計画的に行う他、合同の行事や授業で生徒相互の交流を進めている。

○その他

人権教育の具体的な目標を①自治の力をつける。②人権感覚を高める。③地域と手を結ぶ。という3つの観点としている。また、道徳の時間との関連を重視し、全職員で取組を進めている。家庭学習の支援のため、家庭学習の手引きを作成し、生徒や保護者によりよい家庭学習の在り方について周知を図っている。学力向上のため、T・Tや習熟度別学習など指導方法の工夫改善、補充学習、読書指導の充実を図っている。

3. 特色ある実践事例の内容

◆ 学習活動において保護者や地域の方等との交流を取り入れた取組

(取組のねらい、目的)

学校生活に関する身近な問題に目を向けさせ、よりよい学校生活を送ることができるよう工夫改善策を班で考え、卒業生や保護者、地域の方などの意見や感想を参考にして、問題解決のために自分たちができることを幅広い視点から考えさせる。

また、話し合い活動に積極的に参加し、他の人の気持ちや考えに共感しつつ、それを受け止め、自分たちの考えをまとめさせることにより、「学級での課題を自治的に解決する力」を養う。

(取組を始めるきっかけ)

生徒の実態としては、明るく純粋で、学習や行事に真面目に取り組めるが、保育所等から現在に至るまで小規模な集団の中で育ってきたため、自分を相対化し、適切な自尊感情が育まれにくく、コミュニケーション能力や調整能力が育ちにくい状況があった。

そこで、よりよい人間関係を築く能力や他の人の立場に立って考えることができる想像力などを培い、他の人との関わりの中で望ましい自尊感情の育成を目指すために、地域の関係機関との連携を図る取組を行った。

(取組の内容)

「保護者や地域の方等との交流活動を取り入れた学級活動」(全6時間)

今回の取組は3つの段階で構成する。

第1段階では、「授業」「部活動」「行事」「学級生活(朝終学活・読書・給食・掃除など)」の4つの場面について、「あるべき姿」と「学級の現状」を考える。

クラス全員が意見を出し、自分の意見を仲間に知ってもらおうという活動をとおして、自分と異なる意見があることを知ったり、新しい考えが生まれたりする中で、「仲間と学ぶ」「仲間から学ぶ」という視点で活動する。

次時に、「あるべき姿」に近づけるためにはどうしていくべきか、学級の現状を踏まえて、今後に向けた具体的な4つの場面における「3つの取組案」を班で考え、発表する。

第2段階では、「3つの取組案」を題材にして、学級委員、卒業生や保護者、地域の方を参加者とし、学級活動においてパネルディスカッションを行う。

パネルディスカッションを行う目的は、第1段階で考えた「3つ取組案」について、多様な考え方や意見に触れ、自分の考えを深めるとともに、共感したり、新しい発見をしたりすることで、共に学ぶ仲間だと実感できる集団づくりをする中で、これまでの「3つの取組案」をよりよいものに改善することであり、以上のことを踏まえ、パネルディスカッションを行う。

また、指導に当たっては、以下の視点を大切にする。

- ・「聞く、話す、発表する」のルールを意識した話し合いとする。
- ・提案した内容について、より深く考え、同級生、卒業生や保護者、地域の方な

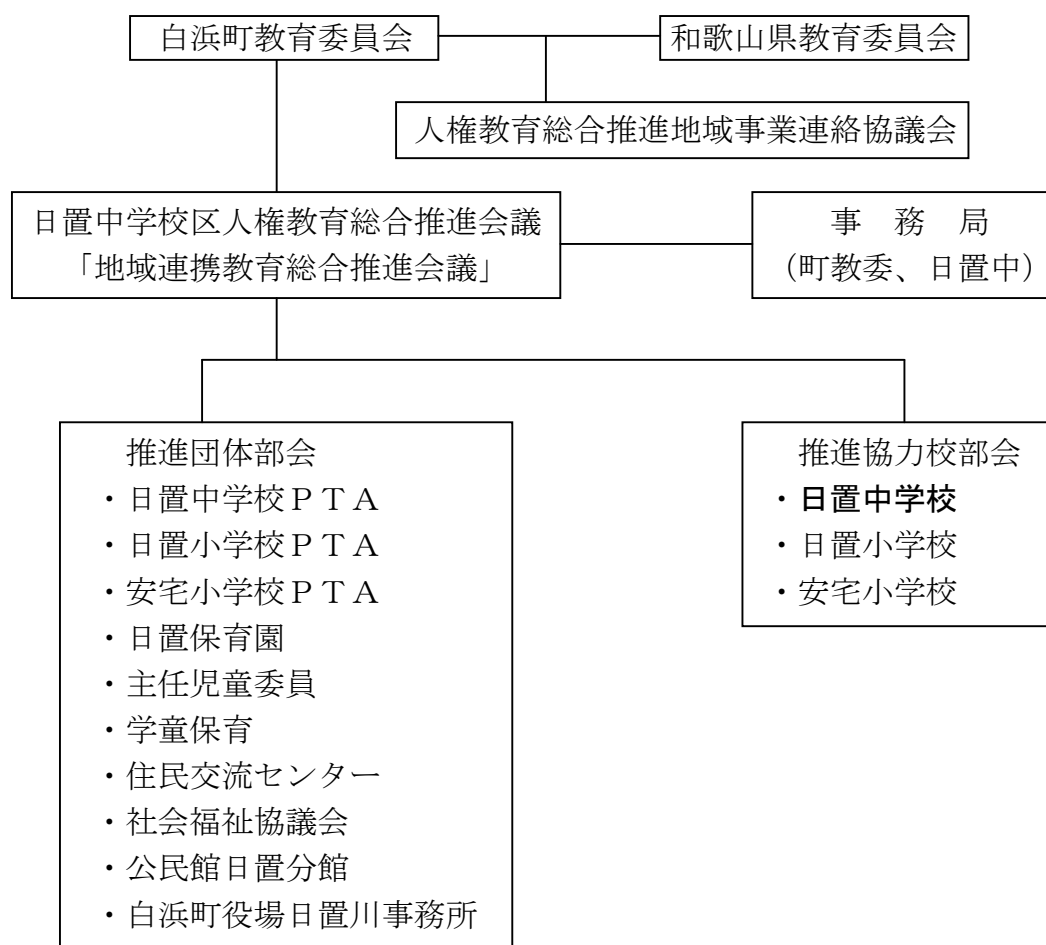
どの考えを聞くことにより、より幅広い視点から問題を捉え直す。

- ・聞くだけでなく、生徒全体が参加する場を設けることで、より主体的に取り組み、自らが解決する意欲をもたせる。

第3段階では、第2段階で改善した学級の「あるべき姿」に向けた「3つの取組案」を実践していく上で、各自が「自分自身にできることは何か」を考え、自分ができることについて4つの場面において考えをまとめる。

その後、学級の「あるべき姿」に向けて各自が考えたことを実践し、定期的に点検し振り返ることを確認する。

(取組の主体や実施体制)



(取組を実現するに当たって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫)

この中学校区では、従前から小学校と中学校の連携は行われてきていたが、授業において地域と積極的に関わる機会は少なかった。今回の学校、保護者、地域の参加による学習単元の開発を行った取組は、子供たちの「日置という地域」への帰属意識を強め、見守られているという安心感につなげるとともに、より学校、保護者、地域のネットワークを深めることにつながると考えた。

パネルディスカッションを聞いて、取組案を見直そう

◎「授業」「部活動」「行事」「学級生活」の4つの視点すべてについて、参考になった言葉や大切だと思った意見などをメモしよう。

授業 取組案

- ①忘れ物をなくすために前日に確認をする
- ②授業態度をよくするために、注意しあう
- ③話し合いに参加するために、1人1回は自分の意見を発表する

《参考になった意見・言葉》

あるべき姿	現状
授業態度をきちんとする 学びのステップを意識する 話をきちんと聞ける、忘れ物をしない 協力して話し合う、まじめに取り組む 積極的に手を挙げる、楽しくてわかる	授業態度がよくなってきている 学びのステップレベル1ができていないときがある 準備物の確認ができていない人がいる 話し合いのときに遊んでいる人がいる 間違うのが嫌で発言しない人がいる

部活動 取組案

- ①みんなで技術を学びあって高めあっていく
- ②けじめをつけるため、決めたことを守る
- ③大きな声をだすため、みんなで注意しあう

《参考になった意見・言葉》

あるべき姿	現状
大きな声をだす、お互いに声かけする あいさつを忘れない、みんなで楽しむ テキパキ行動する、協力し合う 最後まで一生懸命がんばる きちんとしていなかったら注意しあう	一部の人が声を出せていない 大会などであいさつできている テキパキ行動できるようになってきている 一生懸命できている 注意することが少なくなってきている

行事 取組案

- ①常に学びのステップを意識する
- ②自分で気持ちをきりかえる
- ③人のいいところをまねする

《参考になった意見・言葉》

あるべき姿	現状（体育祭のとき）
みんなで楽しんでできる 積極的に参加する 全ての学年が仲良く一丸となる 真剣に協力して取り組める 楽しむときは楽しみ、聞くときは聞く	みんな笑顔で楽しめた 積極的にできていた 1つのことに全員で取り組んでいた 指示を聞き、準備を協力して手伝っていた 話を聞かず、けじめがないときがあった

学級生活 取組案

- ①忘れ物をなくすために、学級でルールを決める
- ②遅刻は減ってきているので、自分で気をつける
- ③あいさつはまだ小さいので、朝学活や終学活を心がける

《参考になった意見・言葉》

あるべき姿	現状
掃除をまじめに協力して時間内にする 全員が静かにきちんと朝読書する 給食で、口に物を入れてしゃべらない 遅刻をしない、あいさつを大きな声で 楽しく充実した学級生活、忘れ物しない	場所によるが、協力してできている 静かだが、たまに他のことをする人がいる 給食を協力してきちんとできている 遅刻・忘れ物は減ったが、なくなる 楽しく過ごせているが、一体となっていない

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

(課題、課題が生じた背景)

1年生には、自尊感情や自己肯定感が低く、自分の考えや意見を発表の場で自信を持って伝えられない生徒が数名いる。パネルディスカッションでは、教室の全員が自由に活発な意見交換ができるか、卒業生や保護者、地域の方とともに自分の意見を表現できるかが課題であった。

(課題に対する対応)

パネルディスカッションで必要となる話合いの手法を事前にグループワークトレーニングで学ぶとともに、以前から授業で活動の基盤となる「学びのステップ」(大阪府の冠中学校が開発したもの)を活用し、発表のルールづくりを定着させてきた。

また、当日意見が出にくい場合は、意識的に声をかけ、学校生活の具体的な場面を想定させたり、他の人の意見を参考にさせたりするなど個別に支援していくこととした。

5. 実践事例の実績、実施による効果

(取組の実績)

- ・卒業生や保護者、地域の方など、年齢や立場の異なる人の考えを知ることにより、自分たちの考えを深めることができた。
- ・班で意見を交流し、他の人の思いに共感しながら、よりよい取組案を考えることができた。
- ・自分に自信をもち、安心して自分の意見を述べることができるようになった。

(取組による効果)

この取組で身につけた「学級での課題を自治的に解決する力」は、2年生での自分たちで問題解決できるようになる取組、3年生での地域社会の課題の解決に向けた取組につながるものと考えている。

6. 実践事例についての評価

(取組についての評価、及び評価する理由)

今回の取組は、人権教育の指導方法の基本原則とされる児童生徒の「協力」「参加」「体験」を中核に置き、問題解決に向けた学校、保護者、地域が一体となって取り組んだ事例であった。

この取組により、学校、保護者、地域のネットワークがより深まり、人権に対する意識を一層高められたと考える。

(保護者や地域住民からの反応)

学校の取組に対する保護者や地域の理解が進み、積極的に協力してくれる方が増え、保護者の学校評価も高くなってきている。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

白浜町立日置中学校

本校は生徒数 58 人の小規模校で、「自分を相対化し、適切な自尊感情が育まれにくく、コミュニケーション能力や調整能力が育ちにくい状況」があった。このような課題を解決するために「保護者や地域の方々等との交流活動を取り入れた学級活動」を実施し、学校・家庭・地域のネットワークを形成した実践事例である。

本実践では保護者、地域の人々が学習単元の開発に参加し、パネルディスカッション等を通して「共に学ぶ仲間」として交流を深め、生徒の地域への帰属意識や見守られているという安心感が醸成されている。「中学校の使命を、地域に根を張り、地域づくりの一翼を担うこと」とした本校のネットワークづくりは、過疎化、高齢化が進む校区における地域との連携の在り方や、小中 9 年間を見通した授業づくりの工夫を考える上で参考になる。